

草庵仏教

第177号
(発行日)
2005年3月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou3@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます
○毎月第一・第三木曜日。
午後7時より真宗共学会。

真宗問答⑨ 罪悪と身体の関係

W「先月、人間の問題には死の問題ともう一つ罪の問題が基本的にあるということでしたね」
D「ええそうです。死の問題と深い関係のある罪の問題があつて、それゆえに浄土に生まれる道を法蔵菩薩はお示しになられたと思います」
W「人間(凡夫)は罪悪の深い存在だということですね」
D「罪深い存在ということは煩惱の深い存在といつてもいいでしょう。煩惱はたくさんありますが、代表的な煩惱に三つあります。貪欲・瞋恚・愚痴です」
W「私は貪欲と瞋恚と愚痴という煩惱を抱えた存在(身)なのですね」
D「そうなのですが、煩惱と身体とは別なものではなくて、非常に密接な関係があると私は思います。普通は身体の中に煩惱があるといいますが、裏からいうと煩惱が形を取ったものが身体とさえ感じられます」
W「身体は欲望と迷い心が形をとったものと感じられる、といわれるのですね」
D「これはもちろん現代の自然科学のように(客観的な)生命

のいとなみを観察した結果からいうのではなく、我が身を内から観る時に感じられるものです。でもこれは単に私だけの考えにとどまらず、仏教の基本的な教にもこうしたことが説かれていると思つています」
W「どう説かれているのですか」
D「仏教の教えの中に十二支縁起というのがあります。それは、生存しているものの苦しみがどのようにして結果してくるかを、十二の因果の連鎖によつて説かれた教説です。十二支縁起の中心は無明↓愛↓取↓有(存在)↓苦という連鎖に表されていると思ひます」
W「この連鎖の上に煩惱と身体の関係があるというのですね」
D「ええそうです。無明とは迷い心でいわゆる愚痴のことです。愚痴が起ると我を立てます。我が立つと我への執着となりそこに愛すなわち欲愛が起ります。欲愛が起ると我が物として何か形あるものをつかもうとします。それが取です。取は物的・心的な要素を何らかの存在(有)という形でつかみます。そしてそれが身として生まれ、身体をもつと老病死という苦し

受けるようになるのではないのでしょうか」
W「こういう話はいままで聞いたことがないのでわかりにくいですね」
D「自分の身体をどのように見るかについてはいろいろな見方があります。今、十二支縁起として我が身を内観するとき、仏教でよく、生まれ変わり死に変わりしてきた流転の身というのが多少ともうなずけてきます。こうした思想はインド仏教の聖者たちが内観したことですけれども、非常に深いものを感じます」
W「すると私が身体をもつて存在しているということは、未だ迷いの中にある迷いの結果をひきずつているといえるのですか」
D「そう思ひます。それに関してですが、釈尊が三十五歳の時さとりを開かれましたがその時の言葉に、

《生まれれることは尽きた。清らかな行いはすでに完成した。なすべきことをなしおえた。もはや再びこのような生存を受けることはない》
といわれました。これはさとりを開いたのもはやこの一生を終えて再び存在(身)を受けなさいといわれた非常に有名なお言葉です」

W「なるほど、今まで迷いの煩惱を持つていたがために、生まれては身を受け、死んではまた身を受ける。そういう生死流転

をくりかえしてきたけれども、今やさとりを開き無明を打ち破つて煩惱を消滅させたゆえに、もはや二度と生まれ変わつて身を受けることはない、と釈尊はいわれるのですね」
D「そう理解してはいます」
W「ということとは現在私が身(体)をもつていいることは迷つて来つづけた結果であり、証拠といえますね」
D「そうなのです。大谷派教学研究所長を以前された西田真因氏が(罪ありて存在に入る)と申されましたが、この言葉にはこうした意味が込められていると思ひます」
W「さつきの釈尊のお言葉では、さとりを開いてもはや再生しないといわれましたが、釈尊の一代かぎりの生涯としてはさとりに後はまだ身体をもたれていましたなぜですか」
D「それはさとりを開いても、現世でのこの身は過去世の結果を受けていることになりすから、一生の期間、身は続くのですね。しかし、この一生かぎりであつて、もう二度と生まれ変わらぬといわれます。たとえば毒草があつて、その根元(無明)を切られても、草が枯れるまではしばらく草の形が残ります。しかし根を切られた毒草は種を生み出す力がありませんから、もはや次の毒草となつて生え出ることはいかならないのです」

W 「それでは一生を終えた釈尊はどうなったのですか」

D 「釈尊はこの世でのいのちが終わって無余涅槃に入られたといわれています。無余涅槃とは大涅槃のことで、煩惱も身も余すところ無く（無余）消滅（涅槃）して、さとり智慧と慈悲のはたらきそのものとなられたといわれています」

*

W 「そういうことと真宗の関係はどうなのですか」

D 「真宗では浄土のことを大涅槃界といわれ、大涅槃のさとりを開く境界といわれています。一生を終えて大涅槃界である浄土に生まれるということは釈尊と同じ大涅槃のさとりを開くことだといわれています。ですからもはや流転しないし迷いの身を取らないのです」

W 「ではいつ浄土に生まれる身となるのですか」

D 「それは大涅槃のさとりを開く因（タネ）である本願の名号（南無阿彌陀仏）を信受した時、大涅槃のさとりの因を頂いたのだから、この身は釈尊と同じようにこの一生の間は続くけれども、臨終一念の夕べに大涅槃の世界である浄土に生まれる、すなわち大涅槃のさとりを開くのであると、宗祖聖人は仰せられています」

W 「そうすると法蔵菩薩がわたしたちに浄土に生まれる道を説いて下さったのは、仏教の基本

の教にそつたものなのですね」

D 「そうですね。しかもそれが特別の聖者や修行者のみの歩める道ではなくて、在家出家を問わず、善人悪人を問わず、賢者愚者を問わず、全ての人に開かれていた法として浄土に生まれる道が説かれたのです」

*

W 「罪悪の身であることが今ひとつ実感できないのですが」

D 「最近そのことと思うのですが、現実の社会での多くの犯罪を見ますと、人間の行いや生活がどこで浅ましくなり、みにくくなり、汚くなり、いやらしくなり、時にはむごくなるのでしょうか。これはハッキリしたこと、人間が浅ましくなるのはお金に関わる問題が一番ですね。それから二番目に男女の問題だと思のです。そのほかにはメンツや評判などの名誉の問題などがあります」

W 「犯罪の多くはお金にまつわるものですね」

D 「ええ、私たちがしばしばわずらい、またそれゆえに欲深くなったり、ごまかしたり、へつらったり、ものおしみをしたりするのは金銭にかかわる利害に關してでしょう」

W 「ええそうですね」

D 「そしてお金の問題はそれを押していけば（食う）こと、食わねばならないという生活の基本に帰結していきます。ですか

ら私たちは食わんがために食欲にもなり、へつらいもし、おべつかもしい、ウソもついたり、ごまかしたりしかねないのです」

W 「そうですね」

D 「食わねばならないというのが生きものの宿命ですね。食わねばならないのは、食わねば生きられない（身）をもっているからではないでしょうか。この身体は一日でも食わなかったらたちまちに衰弱し、動けなくなりついに死んでしまいます。だから是が非とも食わねばならなくなりません」

W 「経済や生計のことは要するに（いかに食うていくか）の問題ですからね」

D 「どうして食うことを確保するか、またどうして安定的に食うていくか。それも自分一人だけでなく、家族を含めて。そうすると私たちは、自己中心の心（愚痴）とセツトになって、財物に対して貪欲になります」

W 「財物への貪欲ゆえに浅ましくなるのですね。しかも財はあればあるだけです。しかも欲しくなるものだとわかっていきますね」

D 「私たちは三度三度食わねばならない身をもっているということですね。そのことが財欲を増長させてしまいます。財欲と身とは切り離せません。本当に（罪悪深重の身）だと思えます」

*

W 「では男女の問題についてはどうですか」

D 「この身は単に食わねばならないという基本条件だけではなくて、オスとメスの性の身体です。それは生物学的に子孫を残すためなのでしょうが、それだけに終わらないのが人間生活です。この性の身は我愛の煩惱がある限り愛欲の心と離れない因縁があります。性愛の心と性の身体とは切り離せません。そしてこの愛欲の身なるがゆえに、どうでしょうか、この世の犯罪はもとより人間生活がいかに浅ましく、きたなくなり、いやらしくなり、そればかりか男女のもつれ、愛憎を引き起こして、苦悩を増大させています」

W 「それで、性愛の身をもっているということに罪を感じるといわれるのですね」

D 「そう感じます。さらには食欲や性欲だけが身体に深く関わっているのではなくて、名誉欲もやはりこの身体があればこそ、増大するのではないですか。私たちの身体は単なる存在ではなくて、自己主張をしている存在です。罪の身が、無明から愛が起こり、愛欲が有（存在・身）となるという教説には深い道理があると思います」

W 「罪悪深重の身ということが少し分かってきました。このようにして流転して続けてきた罪深い存在を法蔵菩薩は大悲もて見たまい、衆生の罪悪の身をいかにして仏身たらしめるか、そのために五劫の思惟、永劫の修

行をされたのですね」

D 「そうお聞きしています」

歎異抄 第十八章第二講

かの安養浄土の教主の御身量をと
かれてさうろうも、それは方便報身
のかたちなり。(歎異抄第十八章より)
現代語訳(経典に阿弥陀仏のお体の大き
さが説かれてはいますが、それは方便と
して示された仮のすがたです)

*

前号で、(法性のさとりをひらいて長
短方円のかたちにもあらず、青黄赤白黒
のいろをもはなれ)ておられるのが真の
仏であるということでありました。とこ
ろで観経などには「安養浄土の教主の御
身量をとかれて」いるが、これはどうし
てであるかという、それは「方便報身
のかたち」であると唯円房はいわれます。

安養浄土の教主というのは阿弥陀仏の
ことです。この阿弥陀仏について観経の
真身観には

「仏身の高さ、六十万億那由他恒河沙由
旬なり。眉間の白毫は、右にめぐりて
婉転し、五須弥山のごとし。仏眼は四大
海水のごとし、清白分明なり。身も
もろもろの毛孔より光明を演出す。須弥
山のごとし」

現代語訳(無量寿仏のお体の高さは六十
万億那由他恒河沙由旬である。また眉間
の白毫は右にゆるやかにめぐり、その大
きさはちょうど須弥山を五つあわせたほ
どであって、その目は四大海水のように
ひろびろとしており、淨らかに澄みきつ
ている。またお体の毛穴から放たれる光
明はまるで須弥山のように大きい)

本来色や形を離れている真実そのものと
いわれているのに対して、たとえ六十万
億那由他恒河沙由旬という途方もない数
量であっても、仏の身を数量で表してあ
るのであるから、無限定な仏身にたいして、
限定的な表現で仏身の大きさが説かれて
いることになりました。それはどういうこ
とでしょうか。

それについて唯円房は、色や姿や形を
こえている仏を形や色で積尊がお説きに
なったのは、仏身を「方便報身」いわば
方便として説かれたのであるといわれる
のです。(唯円房は方便報身といいますが、
親鸞聖人は観経の真身観で説かれて
いる仏身を方便化身と見ておられます)

*

さて、方便というのは梵語ではウパー
ヤといい、近づく、到達するという意味
です。ここでは、真実の仏身をわれわれ
衆生に知らせんがために、仮に姿形でも
って説いて、真の仏を衆生に近づけよう
とする巧みな手だてのことです。しかも
化身という場合は、それこそ真実への目
覚めに導き育てんがための教育的手段で
あって、こうした姿形がそのまま実体的
に存在するというわけではありません。
たとえば阿弥陀仏の目は四大海水(全世
界の海)のように大きいと説かれていま
すが、当然実際にこのような目をした阿
弥陀仏がましますという意味ではありま
すまい。それは阿弥陀仏のお徳が広大無
辺であるということ伝えるために「海
のごとし」と説くことよって、私たち
凡夫は広大無辺というものがどういうも
のであるかを多少なりともイメージする
ことができるのであります。あるいは阿
弥陀仏の光明の無限さを、一つの光でさ
え「須弥山のごとし」すなわちヒマラヤ

山のようにだと説かれることよって、阿
弥陀仏の光明の大きいことが私どもに
少しなりとも思い及ぶことができるので
ありましょう。

積尊が阿弥陀仏の身をこのような姿や
形でお説きになったのは、阿弥陀仏のお
働きを凡夫の私どものレベルにまで下げ
て教導されたのです。それは仮にであっ
ても、姿形を通して知ることよって阿
弥陀仏のお徳の広大なこと、阿弥陀仏の
慈悲の深さの深甚なることを知らせてい
ただき、私たちが阿弥陀仏に帰依し、阿
弥陀仏の浄土に生まれたい願いを起こ
すようにしてください。それをご方便の
教説というのであります。

そういう観経の真身観に方便的に説か
れた阿弥陀仏がさらに方便化されたの
が、御内仏の阿弥陀仏といえましょう。
ですから御本山から下附される阿弥陀仏
の絵像の裏に「方便法身の尊形」と書か
れています。御内仏の絵像の阿弥陀仏や
お木像の仏も、ああいう仏像がそのまま
阿弥陀仏ではないのはいまでもありま
せんが、私たちが阿弥陀仏を拝むときに、
やはり礼拝の対象として仏像があればこ
そそれを拝むことができ、それを通して
真の阿弥陀仏を拝むことになっていく、
いわば真の阿弥陀仏を拝むように育てら
れていきます。もし仏像も絵像もなく、
単に空中に向かつて拝むのは拝みにくい
ものであり、私たちの宗教的な敬虔感情
は満足しにくいものです。

ところでキリスト教やイスラム教から
「仏教は偶像崇拜の教である」と言われ
る場合があります。以前私が大谷派八尾
別院に勤めていた頃、ある檀家さんのお
家にお参りしましたら、御内仏の扉が閉
まっており、扉を開けると花はカサカサ

に枯れ、ホコリが随分たまっていました。
読経の後でその奥さんと話していまし
たら、「家の宗教は真宗ですが私自身は
クリスチャンで、通っている教会の牧師
さんから偶像を拝んではいけないといわ
れ、私は仏壇をあげて拝みません」との
事でした。また先年、アフガニスタンで、
過激なイスラム教徒がバミヤンの大仏
を爆破しました。それも仏像は偶像であ
り、こういうものはイスラムの教に反す
るといので爆破されたのでありましょ
う。大百科事典(平凡社)には、キリス
ト教会では「偶像崇拜は異教・邪教の同
義語とされ、仏教などをも偶像崇拜と断
定している」とかなりシビアに記述し
てあります。

キリスト教やイスラム教などからは、
仏像を造って拝んでいる仏教は偶像崇拜
の教であるといえるかも知れません。し
かし、偶像崇拜とは何かの感覚的な物体
それ自身を霊的で神秘的なものとして拝
むということですが、でも仏教徒が仏像や
絵像を拝するのは、物質的な形体を仏そ
のものとして実体的に拝するのではないこと
はいまでもありません。それは色もな
い形もない真実なる功德(よきはたらき)
を、私たちがそれによつて導かれんがた
めに仮にかたどったものです。そういう
ことを知った上で、形や姿を通して形を
こえた真実に出会わせていただく、その
ための仏像であり絵像なのです。

ですから決して仏教は偶像崇拜の教え
ではありません。けれども真実への方便
をまた大事にする教えです。真実の方便
は仏の大悲より現れたものであり、方便
によつて私たちは仏心大悲を知ることが
できるのです。

《念佛寺春季彼岸会》

3月22日(火)
午後2時始(約2時間)

(どなたでも自由にお参りください)

*道順—JR甲子園口下車。南出口を出て、ミスタードーナツ店横の道を南に。最初の信号の一つ手前の四つ角を東に曲がって50m。駅より4分。